
落ち葉集め

宝石銃士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落ち葉集め

【Zコード】

N7052C

【作者名】

宝石銃士

【あらすじ】

パツとしない主人公真島大洋はある日遅刻寸前で学校に登校する。しかし空いているはずの自分の席で見たものは…。変わっていく主人公の過程を時にはコメディタッチ、時にはシリアスに描く。

プロローグ

午後六時。

町は人で溢れている。

大体はサラリーマンや学生の帰宅組、他に主婦も多い。しかしこの主婦達も大体が買い物帰り。つまり大勢の人が喜びや希望などの+の感情、もしくは逆に-の感情を持つて一日の約半分を過ごす家という場所に向かっている。

午後六時というのはこのような人で賑わう時間帯なのだ。長野県のそれほど田舎ではない場所なので日中は活氣があるが夜は都会の町のほど町の機能はしていない。

その賑やかな通りを高校の制服姿の自分、真島大洋は歩いている。もちろん-の感情を持つて…。父親は単身赴任で小五の時に東京へ。なので働いている母親と二人暮らし。この後のスケジュールは…、七時半…母帰宅

八時…母が買ってきたスーパーの惣菜で夕飯

その後は部屋にこもり暇つぶしに推理小説を読み、宿題をやつたあと就寝。会話は…、無い。これでも中一の始め頃までは会話があつたから驚きだ。

毎日が同じ繰り返し。変化のある生活。退屈。不満。だがそれを変えようとする気もない。

自分の格好も性格が暗いということを示している。ボサボサの髪。眼鏡。ホコリの少しかかった制服。スリムで全く太っていないのが唯一の救いだ。

近年オタクの出現によってこのような人がオタクではないかといふ要らぬ疑いをかけられる。自分は暗い性格と眼鏡、さらに帰宅部という性質を持ち合わせているのでこの疑いがかけられ非常に人間関

係の構築がし難い。ハナツから友達を多く作る気は無かつたがテレビの特集のような人達と一緒にされるのは心外だ。そのことを考える度に秋葉原という遠い名しか知らぬ土地にほんの少し怒りをおぼえる。

帰りがけにCDショップに寄る。不作の口だったからだ。不作といふのは学校の図書室なり市の図書館なりでいいかんじの本が見つけられなかつたことを指す。自分の好みの音楽は人とは少し違うようだ。それがまた人との会話の障壁になつていることは言つまでもない。

ギイイイイ、

重々しい音をたてて分厚いガラスの扉を開ける。自動ドアにして欲しいのはやまやまだがここは儲けふりと店長の趣味からして潰れても変わらないだろうと思われる。

扉から手を離すとまた重々しい音をたてて扉はしまつた。

まず立ち寄つたのはノップのランキングコーナー。ここでテレビで見たいい感じの曲を買おうか迷いながら店内を一周し色々なCDを見る。

しかし今日はアーティストは早期決着を望んでいたようだ。

「今日は一段と沈んだ顔をしてるね。」

四十代ぐらい、背は高い。サングラスにバンダナを頭に身に付けている。汚れるわけでもないのに紺色のエプロン着用。さらに店の名前のプリント入り明らかに時代に乗れてない。この店の店長だ。

お前の考えは読めている

コイツは熱狂的なジャズファン。しかも吹奏楽部がやるようなものではなくかなり昔のものだ。それだけならまだしも来客に（しかも若者）に熱くジャズについて語りだすのだ。

「ここでお勧めするのがこの「トニー・エリントンのアルバム」…ジャズ界の仏様といわれるほどに…」

「最近いい曲無いですね。また来ます。」

そして店内を駆け抜ける。店長に悪いかもしけないが躊躇すると負ける。入口にある出入口を拒むような重々しいドアも今の自分の前では自動ドアになる。

ハアハア。

流石にルールはわきまえているようだ。店外までは追つてこない。元々こうなることは解っていた。だがここまで早く絡んでくるとは…。いつもは買った後に絡みたぶんレジ下からだしたであろうCDを片手に語りだす。やはり店側として先ず買ってもらわないと困るようだ。しかし今日は違つた。パチンコに勝つたのだろう。お陰でCDは買えなかつたわけだが…。

家に帰ると七時半をまわっていた。先に帰つた母と無言の食事。焼きそばとカボチャ「ロッケ、サラダ、ご飯。十日前と七日前のメニューの見事なコラボだ。感動することなく食事を終え部屋へ。

読みかけの推理小説を読み始める。いま読んでいる本は犯人視点で話が進む。不幸な境遇の犯人が仲間や過去を捨て、犯罪に走つていく。裏表紙のあらすじを見て買おうと思ったが意外に中弛みが激しかつた。百ページほど読み進めたところで力尽き眠りに入った。

こうして自分の人生を少しばかり変える不思議な体験をする一年が始まった。

プロローグ（後書き）

小説初挑戦です。ストーリーは思い浮かぶのですがタイトル決めるのが一番苦手で…（-_-）。タイトル変えるのかな…。文章下手ですのにお手柔らかにご意見よろしくおねがいします。

悪夢を見た朝に

ハアツ、ハアツ

どれ程走ったのだろう?

しかしどんなに走つても走ることを止める気がしない。いや、止めてはいけない気がする。

追われている…。

しかしそいつが誰で何故追つているか俺には解らない。しかし奴はただ俺を追いかける。近づきもせず離れもせず、まるで自分の陰のようだ…。

坂を下り、砂地を駆け抜け、階段を降りてついに薄暗い部屋に逃げ込んだ。壁に背を向け座り込み、入口に目を向けた。体の震えが止まらない。頭を抱えて奴に向かって叫んだ。

「俺はお前とは違う!! 現状に満足していいのに何もしない!! 俺は生きてやる!! 金も家族も過去も全てを捨ててでも!! 絶対に行きてやるう!!。」

「うううううううう…あれ?」

そこは紛れもない自分の部屋だった。横に昨日読んでいた小説がひどい様子で転がっている。しばらくして状況が掴めてきた。昨日本を顔の上にのせ眠り込み、夢で飛び起きた拍子に読んでいた本が顔の上から吹つ飛んだのだろう。あの夢は…、たぶんこの本を読んだせいでの見たのだろう。

「しかし…、悪夢で叫び声をあげるなんて…」

時計は八時十五分、一時間目が始まる十五分前をさしていった…。

「うわああああ！－何でこんなことに…！」

超速で学校に行く準備をする。幸い宿題がなかつたので学校のロッカーに全て教科書は置いて来ている。だから五分で準備することが可能になり、十分で学校まで行き、そして間に合ひことが可能となる。しかしつもの通学カバンが見つからない。仕方なく予備用のカバンを持って玄関に向かう。

「起こしてくれればいいものを…、自分だけ朝飯食つて出かけてやがる…。」

大急ぎで玄関に向かう。靴を履くのに2・5秒。そしてドアの鍵をかけるのに7・3秒。

「登校準備、四分半。 いける！－」

自分の愛車（近所の自転車屋で8950円）が唸りをあげて猛スピードで学校に向かう。

しかし、もし落ち着いていたらいつもと変わらぬ風景故に見分けにくい奇妙な点、つまりいつもと同じように一人分の食器が流し場にあつたことに気付いただろ？…。朝飯を食べていないにも関わらず…。

そして八時一十九分の学校の駐輪場。ドリフトカーブをしながら突つ込んでくる一台の自転車。事故でも起こつたように聞こえるほどの大きなブレーキ音を立て自転車を止め、自転車から降り、急いで下駄箱に向かつた…。だが靴を脱ぎ終つた後でチャイムが鳴り始める。

「まだだ！－まだ終わつちやいない！－」

教室は一階、席も珍しく入口のすぐ目の前、いけるはずだ。一段飛びで自分でも恐ろしくなるようなスピードで階段を駆け上がる。教室がみえた！－しかも教師軍団はまだ来ていない。

「ホントに遅刻するかと…」

勝利を確信し、入口手前で減速。膝に手を突き上がった息を整えた

…。

しかし確信した勝利は数秒後に思いもよらない形で打ち砕かれた。下を向いていた顔を上げると俺の席にはいてはいけないはずの人間がいた。眼鏡をかけ、いまいちパツとしない顔つき、身なり、雰囲気。読書に熱中している。そして机の横には探していたカバン。そこに座っていたのはまさしく俺自身だつた。

俺の体はそのまま凍りついた。そこに永遠とも思えるような時間が流れた。ホントはその時間はたつたの数秒だつたのだろう。

鳴り终えていなかつたチャイムが流れた。俺を嘲笑うかのように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7052c/>

落ち葉集め

2010年10月10日05時23分発行